

## 研究発表もうしこみフォーム

氏名：朝魯孟格日勒

氏名のローマ字表記：Cholmongerel

所属：中国内モンゴル大学モンゴル歴史学専攻

専門分野：清代モンゴル史

発表のタイトル：清代外モンゴル・アルタイ軍台におけるハブスルガとその牧地実態

発表要旨：

清代外（ハルハ）モンゴルにおけるハブスルガは、駅戸らと同様に、駅のアルバ（賦役）の担い手として、駅の運営体制の中で重要な役割を果たしていた。従来の研究では、清代外モンゴル・アルタイ軍台におけるハブスルガ設置の背景や状況、ハブスルガの牧地実態及び行政管理等といった基本的な問題に関して、地方档案史料を用いた実証研究は数少ない。

本稿では、モンゴル国立中央文書館等所蔵の公文書史料と牧地図を利用し、清代外モンゴル・アルタイ軍台におけるハブスルガの設置過程と牧地実態等を実証した。その結果、以下のような知見が得られた。まず、外モンゴル・アルタイ軍台のハブスルガ設置は、乾隆 20（1755）年に軍事需要による駅のアルバ増加のため、参贊大臣フデ（富徳）の提案で駅のアラー・アルバを補助する目的で、駅近くから旗から家畜を所持する幾戸の家庭を駅周辺に一時住ませたことに由来する。後の乾隆 47（1782）年にトゥシェートウ・ハン部サイル・オソ路、ウリヤスタイ南路、張家口路の駅等に馬やラクダ 90 頭、食用羊 50 頭の家畜持ちのアラーチ 6 戸からなるハブスルガが再び設置され、駅から分離されたアラー・アルバを完全に担うようになった。次いで、ハブスルガはその所属盟より任命された台吉や参領の下で区分・管轄されていた上、通常は、一人の台吉や章京等がいくつかの駅に配置されたハブスルガを統轄していた。更に、ハブスルガの牧地は、基本 3-30 箇所の冬营地、3-10 箇所の井戸と言った範囲のものであり、駅地に隣り合って片側または両側に分布していた。これは、オボー設置によって画定された盟、旗や駅の牧地とは“性質的”に異なる。総じて言えば、清代外モンゴル・アルタイ軍台におけるハブスルガは、所属盟旗の管轄下でありながら、特定の分配地で駅のアラー・アルバを負うマイノリティー集団であったと考えられる。